

インドヒマラヤの水牛遊牧民グジャール族

—その生活と定住化— (二)

吉 住 知 文

はじめに

一、グジャールとは

二、ヒマラヤ・グジャールの形成

(ア) グルジャラ (古代のグジャール)

(イ) ヒマラヤ・グジャールの形成

三、ヒマラヤ・グジャールの生活

(ア) 遊牧グジャールの例

(イ) 移牧グジャールの例

(ウ) 定住グジャールの例

(以上本号)
(以下一〇七巻2号)

四、ヒマラヤ・グジャールの定住化の諸問題

(ア) 定住化の非行政的要因

(イ) 定住化の行政的要因—森林政策、定住政策—

(ウ) 森林政策、定住政策の問題点

おわりに

はじめに

かつて旧大陸に広範に分布した遊牧・移牧⁽¹⁾という移動式牧畜形態は、生活様式の変化、牧地維持の困難化、企業的牧畜・酪農の発展、政府による定住化政策などにより多くの地域から姿を消した。また消しつつある。このような遊牧民・移牧民の人類学的、民族学的な研究は、内陸アジア、西アジア、東アフリカ、地中海周辺を中心に数多くなされてきたが、インド亜大陸のものについてはガッディー (Gaddi) などごく一部を除いて従来あまり注目されてこなかった。⁽²⁾しかしインド亜大陸においてもヒマラヤ地域を中心に多彩な遊牧・

移牧活動が展開されてきたし、現在も彼らはインドヒマラヤ地域の重要な社会的構成要素であるとともに、地域経済の中でも大きな地位を占めている。たとえばガッデイー、ボーターイー(Bhoti)、キンナウラ(Kinnaura)、グジャール(Gujar)などがそうである⁽³⁾。しかし彼らの遊牧・移牧もまた、移動時に自動車交通の障害となること、教育や医療などの近代的便宜の希求、中央政府・州政府による環境保全政策及び定住化政策などによって次第に姿を消しつつある。

本稿はそのような状況にある遊牧・移牧民の一つ、ヒマラヤ・グジャール族の形成過程を整理するとともに、牧畜活動の現状を現地調査に基づいて報告し、さらに定住化が抱えている諸問題を考察しようとするものである。

一 グジャールとは

グジャールはヒマラヤだけに住んでいるわけではない。南はアーンドラ・プラデーシュ州から北はパキスタンの北西辺境州にかけての広い地域に住む部族・カ

ーストである⁽⁴⁾。四〇〇万人以上と推定される人口を擁しているが宗教、生活様式、言語が大きく異なる集団を含んでおり全体として一つの民族とは言い難い、一つの部族、カーストと言うにも無理がある。

今日のグジャールは大きくは三つのカテゴリーに分類できる。居住地からは平原地帯(ヒマラヤ山地から平原への漸移地帯やデカン高原などの丘陵地帯を含む)に住み、主として農業または定住牧畜を営む「平原グジャール」と、ヒマラヤ地域に住み、主に水牛の遊牧、移牧に従事する「ヒマラヤ・グジャール」に区別できる。一方宗教からは「ヒンドゥーグジャール」と「ムスリムグジャール」に大別できる(少数だがシク教徒のグジャールもいる)。ところが「ヒマラヤグジャール」にヒンドゥーはほとんどいない。つまり「平原ヒンドゥーグジャール」「平原ムスリムグジャール」「ヒマラヤ・ムスリムグジャール」が存在することになる。これらをそれぞれ「ヒンドゥーグジャール」「平原ムスリムグジャール」「ヒマラヤ・グジャール」と呼ぶことにする⁽⁶⁾。

このうち平原グジャールはガンガ・ヤムナ (Ganga-Yamuna) 平原、パンジャブ (Punjab) 平原を主要居住地としさらにヒンドゥーグジャールは南のデカン高原南部にまで広がっている。そのうちヒンドゥーグジャールは自他ともにラージブート⁽⁷⁾を認じて、それぞれの地域でドミナント・カースト (dominant caste)⁽⁸⁾を構成することも多く、有力な社会的勢力である。一九三一年センサスでも、南のいくつかの居住地域では「先進ヒンドゥーカースト (Advanced Hindu Caste)」に分類されている。平原ムスリムグジャールは、経済的にはヒンドゥーグジャールに比して必ずしも低いわけではないが、ヒンドゥーのカースト序列観による差別のため社会的地位は低い。平原グジャールは農耕民が多いが、都市近郊では水牛や牛を飼育しミルクを生産する酪農従事者の割合が大きい。

一方ヒマラヤ・グジャールの主住地は、インドでは筆者が調査した三地域すなわちウツタル・プラデーシュ州の北西部バギラッティ (Bhagirathi) ガンガすなわちカンジス川の上流(谷)、ヒマチャル・プラデーシ

ユ州のクール (Kulu) 谷、ラジ (Raji) 谷地方、および未調査のジャムム地域である。(パキスタンではプーンチ (Poonch)、ムザッファラバッド (Muzaffarabad)、ハザラ (Hazara) が主住地でパキスタン最北のギルギット (Gilgit) にまで分布している)。本来ヒマラヤ・グジャールは遊牧民であるが、近年では移牧や定住牧畜を営むものが多くを占めるようになってきている。遊牧や移牧の対象家畜は水牛が多く、牛を混ぜることもある。いずれも搾乳用でミルクやバターを生産によって生計をたてている。定住したのも多くが水牛による酪農を営む。ムスリムが多数を占めるカシュミール地方を除いては、平原ムスリムグジャール同様、ヒンドゥーからは差別を受けている。例えばヒンドゥーは彼らからミルクを買わない場合があるし、筆者の調査でもヒンドゥーのポーターが彼らと会おうのを嫌ったことがあった。しかし彼らの経済的状況は決して定住民に劣るものではない。彼らの問題は経済的であるよりも社会的なものである。特にその移動生活のため教育、医療、衛生といった近代の便宜、

表I ヒマチャル・ブラデーシュ州のグジャール人口
(1981)

	農 村		都 市		合計
	男	女	男	女	
ヒンドゥー教	8,268	7,622	84	46	16,020
ムスリム	6,343	5,733	3	3	12,082
キリスト教	6	9			15
シク教	2				2
仏 教	1	2			3
合 計	14,620	13,365	87	49	28,121

(出所) Census of India 1981, series7 part-ix より筆者作成。

(注) 1966年バンジャブ再編法による編入地域を除く。

政治参加などから遠ざけられていることである。さてグジャールの人口であるが、現在のインドには指定カースト・指定部族⁹⁾にリストアップされている地域以外では部族・カースト別のセンサスはない。最も新しいセンサス調査年である八一年現在、グジャール

族が指定部族になっているのはヒマチャルブラデーシュ州だけで(指定カーストになっている州はない)、ここではセンサスからグジャールの職業、宗教、就学状況などを知ることができる。ただし一九六六年のバンジャブ再編法によってヒマチャル・ブラデーシュ州に編入された地域については、それ以前のバンジャブにおいてグジャールが指定部族にリストアップされていないだったので、編入後もリストから除かれており統計も公表されない。また遊牧人口、移牧人口も分からない。参考までに一九八一年センサスによるとヒマチャル・ブラデーシュ州のグジャール人口は別表の通りである。

インド全域にわたるグジャールの人口は部族・カースト別の最後の人口統計である一九三一年センサスより推計するしかない。三一年センサスによる地域、宗教科別グジャール人口は別表の通りである。このセンサスの県レベルのグジャール人口を見ると当時の分布は分かるが、その後分離独立の際に大規模な人口移動があったので、現在の分布を推定するのは難しい。また

(81) インドヒマラヤの水牛遊牧民グジャール族

表II 地域別グジャール人口(1931)

State/Province	Muslim	Hindu	Sikh	合 計
North Western Frontier Province	121,367	132	11	121,510
Jammu & Kashmir	402,781			402,781
Panjab	521,347	170,434	4,646	696,427
United Province	73,699	287,615		361,314
Rajputana		526,791		526,791
Ajmer-Merwara	62	35,001		35,063
Central Province	33	59,995		60,028
Central India Agency		84,813		84,813
Gualior		119,814		119,814
Bombay Presidency		690		690
Hyderabad		8,063		8,063
合 計	1,119,289	1,292,386	4,657	2,416,332

(出所) Census of India, 1931より筆者集計。(注) 1931年は独立前なので現パキスタン領の人口を含む。パンジャブは分割前のもの。Rajputanaは宗教別に人口が示されていないがヒンドゥーが圧倒的多数と思われるのですべてヒンドゥーに入れた。

職業なども分らない。一九六〇年の「非定住部族の日会議」(Nomadic Tribes Day Conference) の「ランサスで州レベルでの非定住民数を調査すること」という決議の速やかな実施が待たれる。⁽¹⁰⁾

二 ヒマラヤ・グジャールの形成

つぎに本稿の対象とするヒマラヤ・グジャールは歴史的にどのように形成されたのであろうか。結論的に言うところでは、現在のところその形成史には定説はないし、諸説を裏付ける史料も極めて少ない。ここでは今までのグジャール形成史の論点を簡潔に整理し、形成史を仮説として提起しておきたい。

(ア) グルジャラ(古代のグジャール)

歴史に初めてグジャールが登場するのは六世紀中ごろであり、それ以前の歴史

は不明な部分が多い。グジャールの民族的系統ついても諸説が提出されているが、その最大の争点はグジャールをインド・アリア系と見なすか⁽¹¹⁾、後代の外来民族と見なすかである。後者には、紀元前後にインド亜大陸に侵入したインド・スキタイ (Indo-Scythian) 系遊牧民と考えるものと、エフタル (Ephthalites) などの白フン (White Hun or Huna) 族とともに五、六世紀に侵入した遊牧民と見なすものなどがある。また侵入経路も中央アジアからアフガニスタン↓カイバール↓パンジャーブ↓ラージャスターンとするものと、中央アジアからアフガニスタン↓ボラン (Bolan) 峠↓インダス下流↓ラージャスターンとするものなどがある。グジャールをインド・アリアと見なす説でも、少なくとも五、六世紀頃までの主住地はラージャスターン州南部のアーブー (Abu) 山周辺としている。グジャールの起源がいずれであれ、グジャールが歴史に初めて登場するのは六世紀中ごろの現ゾドプーール (Jodhpur) 地方に起こったグルジャラ (Gurjara) 族 (グルジャラはグジャールのサンスクリット語形で

ある) の小王国であることは、多くの史家の認めるところである⁽¹⁴⁾。またそれより少し後には同じ一族により、現在のグジャラート州南部のバルーチ (Bhruch) やマディヤ・ブラデーシュ州のマルワー (Malwa) にグルジャラの王国ができてゐる。やはり六世紀中ごろ以降、デカン高原南部の現在のカルナータカ州から北のマハラーシュトラ州にかけて広大な版図を持つ前期チャールキヤ朝が栄えたが、この王朝の王族については、グルジャラとする説とそれに否定的な説がある⁽¹⁵⁾。玄奘は七世紀にこの王朝を訪れたものの、王はクシャトリアであるとしているだけでグルジャラ族であるかどうかにはについては触れていない⁽¹⁷⁾。一方玄奘はその後訪れたゾドプーール地方を豊折羅国として記録を残している⁽¹⁸⁾。豊折羅は Gujara を音写したものと考えられるが⁽¹⁹⁾、上記のゾドプーール地方に始まったグルジャラ王国であろう。

八世紀にはアラブの侵入による混乱とそれへの抵抗の中から、玄奘が訪れた豊折羅の王の後継者によってマルワー地方に建てられたグジャール小国家が強大に

なりグルジャラプラティハーラ朝が成立する。この王朝は九世紀に発展して十一世紀まで続き一時は北インドの大半を支配した。この王朝の北部、東部への発展とともに、グジャールは南部ラージャスターン（またはその周辺）から東部ラージャスターン、ガンガ・ヤムナ平原へと広がっていったと考えられる。たとえば十世紀後半に約一万八千人のグジャールがビンマール(Bhimmal)玄奘の記した豊折羅國の首都に比定される⁽²⁰⁾からデリーに移住したという伝説⁽²¹⁾や、現ラージャスターンとほぼ一致する領域が少なくとも十世紀⁽²²⁾まではグルジャラートラ (Gurjaratra) と呼ばれていたことなどがこの推定を支持している。この時代のグジャールの生業については直接的に示す史料はないが、上記のデリーへ移住したグジャールが集落を作ったことなどから、遊牧を行うもの以外に相当の割合のものが定住牧畜、定住農耕に従事するようになっていたと思われる。これら定住者がヒンドゥー・グジャールの初期形成者である。

以上がグジャラの歴史である。しかしこの古代のグ

ルジャラは現在のグジャール、特にヒマラヤ・グジャールとどうつながるのであろうか。プラティハーラ朝の終焉とともにグジャールは政治の表舞台から降りてしまった以上、両者を繋ぐ証左があるとすればそれは伝説と極めて断片的な史料の中に探るしかない。

(イ) ヒマラヤ・グジャールの形成

先ず重要な問題は、ヒマラヤ・グジャールが果たして古代グルジャラの末裔なのかどうかである。これについては十九世紀後半にインドで行われた大規模な言語学調査の興味深い結果が重要な示唆を与えてくれる。

それによると現パキスタン北部山地のスワット(Swat) 地方からカシミールにかけて住むヒマラヤ・グジャールが話すグジュリー (Gujuri) 語は、六百マイルも離れたラージャスターン州東部のアルワール (Alwar) 地方のラージャスターニー (語) の方言メワティー (Mewati) とほぼ一致する。また東部ラージャスターンにはグルジャラの後裔と考えられるラージプートの有力氏族、チョウハン氏がいるが、スワット地方のヒマラヤ・グジャールにもチョウハン

(Chauhan) 氏族がいて言語的にも極めて近いということである。⁽²³⁾ これらのことからスワット、カシュミールのヒマラヤ・グジャールが東部ラージャスターンから移住したか、逆方向に移住したことが想定される。しかしヒマラヤからラージャスターンへの移動者がヒマラヤにラージャスターニーの方言を残すことはありえないから、東部ラージャスターンのグジャールがカシュミールやスワットへ移住したと考えるのが自然である。グジュリーの方がメワートイより古い形を残しているといわれるが⁽²⁴⁾それはヒマラヤ・グジャールが遊牧という、より孤立的な生活様式を続けたためと解釈できよう。

またグジュリーがヒンドウスターニー(ヤムナ平原地方の言語)、パンジャービー(語)をその中に残していることから、ラージャスターン→ヤムナ平原→パンジャーブ平原→ジャンムー・カシミールおよびスワットと段階的に移動したと考えられる。⁽²⁵⁾

いくらかのニュアンスの違いはあっても、ヒマラヤ・グジャールはラージャスターンから移住してきた

ことを示唆するものは他にもある。前節に記したように、十世紀に多くのグジャールがラージャスターン南部からデリーに移住したという伝説。さらにそのデリーのグジャールが十六世紀中ごろパンジャーブ・カンデー(Kandiヒマラヤ山脈群の中で最も平原側にあるシワリク(Sivaris)山脈の平原側斜面地帯)へ移住したとの系図記録や伝説。⁽²⁶⁾ パキスタンパンジャーブの現グジラット(Gujrat)は当時(十六世紀はじめ)すでにグジラートと呼ばれ、その支配者はもとヒマラヤスターンのトルク(Turk)出身のラージプートでイスラームに改宗したグジャールであったことを示唆するバーブルの記述。⁽²⁷⁾ ヒマラヤ・グジャールに見られる交換婚(二つないし三つの家族が女子を交換することによって結婚が成立する)が古い時代のラージプートの習慣にもあること⁽²⁸⁾などがそれである。

次にヒマチャル・プラデーシュ州やウツタル・プラデーシュ州のグジャールの形成に關しても興味ある伝説や伝承がある。まずチャンバ(Chamba)のグジャールが六世代ほど前にジャンムー・カシミールで牧地

が少なくなつたために移住したといわれていることで、今でも初期移住者の系譜をたどれるといふことである。⁽²⁹⁾ 筆者の調査でもチャンバ県のサーフー (Sahu) のあるグジャールは祖父の時代に牧地の不足のためカシミールのバラムラ (Baramula) から移住したと言っている。またシルムール (Sirmur) 県のグジャール伝説では、この地のシャムシール (Sirmur) 王がブーンチの王家と婚姻関係を結びにブーンチを訪れた時、その豊かなミルクがグジャールによるものと知って、ブーンチの王に懇請してグジャールを連れ帰つたとある。⁽³⁰⁾ また筆者の調査でマンディー (Mandi) 県ナグワイン (Nagwain) 村のグジャールの古老が、自分達は二百―三百年前にジャンムーからやってきたと言っていること。同じく筆者の調査したバギラッティ河谷のドーディー・タール (Dodi Tal) のグジャールたちは二百五十年ほど前にジャンムーから移住してきたので、ジャンマウル・グジャールと呼ばれていることなどである。

以上のことからヒマチャル・プラデーシュ州やウツ

タル・プラデーシュ州のヒマラヤ・グジャールはジャンムーやカシミアから移住してきたことが分かる。これまでの考察と合わせると、ヒマラヤ・グジャールは、東部ラージャスターン↓ヤムナ平原↓パンジャール平原↓ジャンムー・カシミア↓ヒマチャル・プラデーシュ、ウツタル・プラデーシュの山地、またパンジャール平原↓スワット↓ギルギットと移動してきたことになる。

移動の原因については、それを直接的に示す史料は極めて少ないが、筆者は次のように仮定している。ラージャスターンは乾燥地域で飼料が少ない上に、人口が増加してきて(現在世界の乾燥地域の内でも最も人口密度が高いと言われる)⁽³¹⁾ 牧地の競争が激しくなつたため、ガンガ・ヤムナ平原、パンジャール平原などの耕地化されていない河川敷や後背林、丘陵斜面林へ移動した(実際前世紀末でも多くのグジャールがそのような地域に居住している)⁽³²⁾。この地域は湿潤で農耕に適しているので耕地を手にいれることができ、伝統的生活を捨て新事業に着手する意欲を持つものは定住した

に違いない。残りのものはここでも牧地の競争が起こり、さらにジャンムー・カシミールの牧地に移動した。ヒマチャル・ブラデーシユ州やウツタル・ブラデーシユ州の山地ではなくジャンムー・カシミールに移住した理由は何であろうか。ひとつにはカシミールの方が良いアルプ(マルグ marg、バハク Bahak、ナリー nai などと呼ばれる)が多いことである。また交通事情、アルプの標高(森林限界線にもつばら影響される)や地形などアルプへのアクセスや放牧上の条件も、ジャンムー・カシミールの方がヒマチャル・ブラデーシユより優位であったことによると考えられる。

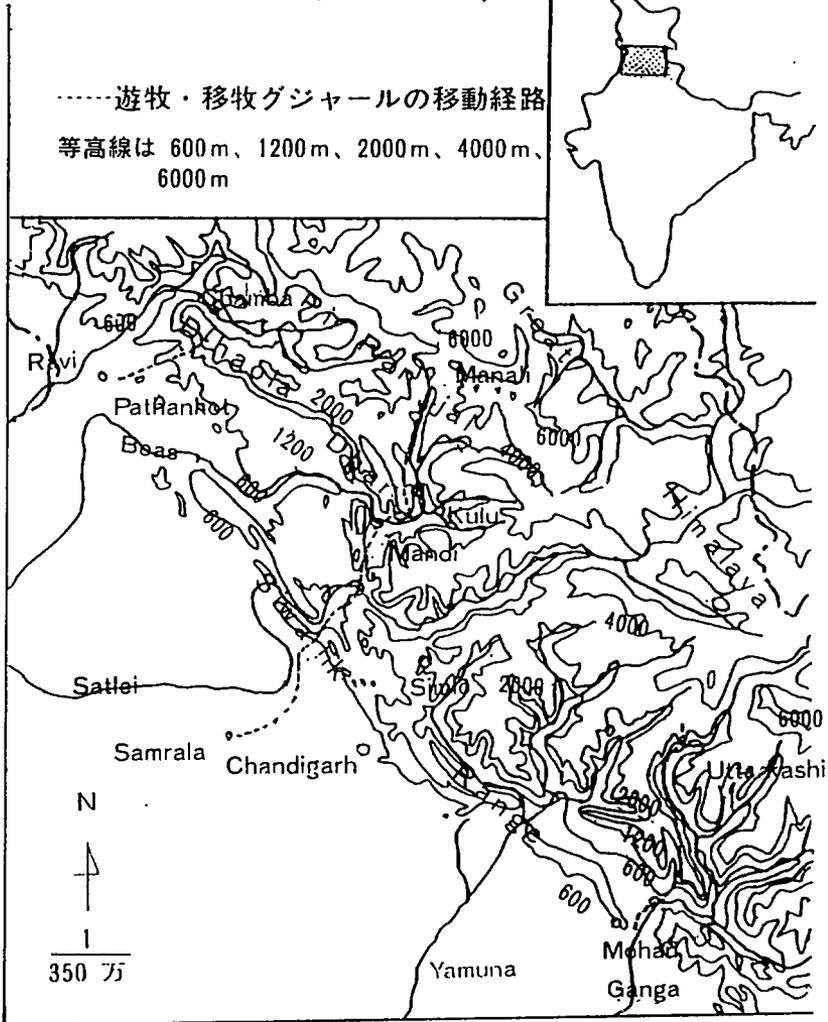
それにしてもなぜムスリムグジャールだけがジャンムー・カシミールへ移住したのであるか。十二世紀に成立したカシミール史ラージャタランギーニにグジャールの記述がなく、ジャハンギール時代(十七世紀はじめ)にカシミールのグルマルグ(Gulmarg)にグジャールが遊牧しているとの記録から、このあいだの期間にグジャールがカシミールに進出したと考えられる。もしこれがカシミールのイスラーム化(十四世

紀)以後であれば、カシミールのイスラーム化がムスリム・グジャールを引きつけた一因であろう。ムスリムはヒンドゥーと違ってムスリムの搾ったミルクを飲むことへの抵抗も少ないからである。もっともヒンドゥーグジャールが移住した後にカシミールのイスラーム化とともに改宗したことも充分考えられる。ちなみに平原グジャールの改宗時期については、チムールの侵入時(十四世紀末)に改宗させられたというオウド地方のグジャールの伝説⁽³⁴⁾や、十五―十六世紀のムガル帝国の成立前に改宗したとの説、アウラングゼーブの改宗圧力によるとの説⁽³⁶⁾などがあるが、それぞれの時代に改宗があったと考えるべきであろう。

三 ヒマラヤ・グジャールの生活

遊牧を行っているヒマラヤ・グジャールは後述のように減少の一途をたどっているが、その本格的な民族学的調査はまだほとんど行われていない。単に記録を残すという意味からだけでなく、定住化政策立案の上からも一刻も早い本格的な調査が待たれる。それ

調査地域とグジャール族 の移動経路 (筆者作成)



との間を多少とも繋ぐ意味で、不十分なものではあるが筆者の行った調査の一部をここに紹介しておきたい。調査は一九八九年の夏に行った。先行調査がないため事前には夏の放牧地の位置さえわからず、すべて現地へ行ってから放牧地の情報を集め、訪問するというロスの多いものであった。調査は筆者が単独で行ったので、現地で通訳と場合によってポーターを雇用して放牧地へ入り面接調査法で行った。

(7) 遊牧グジャールの例

ウツタル・ブラデーシュ州ウツタルカーシー(Utarkashi)県の県庁所在地ウツタルカーシーより北に四十分ほど山に入ったバスの終点から急坂を六時間ほど登るとドーデー・タール(Dodi Tar)という池がある。ヤムナ河とガンガ本流であるバギラッティシ河の分水嶺の稜線に近い標高約二千九百メートルのところにある。ウツタルカーシーから直線距離で北へ十五キロである。十一のグジャールの家族がこの近辺を夏の放牧地に使っている。

そのうちの一人、ヌール・アハマッド(三十歳)の

事例を紹介する。一家の伝承では約二百五十年前ジャンムーから、ウツタル・ブラデーシュ州のデラ・ドゥン(Dehra Dun)地方に移住してきたが、自分から四代前に一族の紛争があつてこの地に来たという(ここでいう移住地は夏の牧地を指す)。現在生計をとともにする家族は母、妻、子供ふたりの計五人である。彼の姉妹五人、兄弟二人は分家したり結婚したりで生計も生活も別である。同一生計家族数は平均的なヒマラヤ・グジャールが十一二十人であるのに比べてかなり少ない。所有家畜は牝水牛一、牝水牛七十五、牝牛二、去勢牛一、牝牛二、去勢馬二、牝馬一である。水牛・牛は搾乳用、馬は運搬用である。ドーデー・タールのグジャールの所有牝水牛頭数の平均が約二十五であるから、それに比べるとかなり多く相当の富裕層といえる。

グジャールは移動の時にはキャンバス地の簡易テントを用いるが、夏冬の牧地では他の内陸アジア、西アジアの遊牧民と違ってテントは使わずに小屋を建てる。普通夏の牧地の小屋は森林限界のすぐ下(森林限界の

上が主要牧地になっている)の森林の中にある。アハマッドの小屋も例外ではない。小屋のプランは間口六メートル奥行き八メートルの長方形で、高さは四メートル程である。屋根は小枝の上に草を葺いた寄せ棟で、壁面は丸太を縦割りまたは縦挽きにした板でできている。この小屋の構造はボースの報告している、カシュミールのグジャールの小屋の構造³⁷⁾とは全く違う。入り口を入ったところに暖房用かまどがあり、この周りがいわばリビングの空間である。その奥にベッドがある。かまどの右側はやはりリビングの空間で、メッカに向かっての礼拝はここで行われる。右手真ん中あたりに炊事用かまどがあつて台所になっている。その他は牲畜をいれる空間である。屋根には雨漏りを防ぐ大きなビニールシートをかけてある。(筆者の調査したほとんど全ての小屋の屋根に同様のシートが用いられていた。)家財道具が数点あるだけのこの小屋も他のグジャールと比べると格段に大きく堂々たるものである。冬の牧地にも同様の構造の小屋があり、この小屋は冬の間はそのままに放置される。

放牧活動の概要は以下の通りである。まずこの夏の牧地に五月にやってくる。ここで八月まで四カ月間放牧する。この牧地は州の森林省 (Forest Department) の管轄地であり、放牧するためには森林省に申請して許可を得なければならない。その際全期間につき水牛は一頭あたり十六ルピー (一ルピーは約九円)、他の家畜は十ルピーの放牧権料を支払わなければならない。仔畜は全て無料である。この放牧権料は、水牛一頭のミルクからの収入が一日あたり約二十五ルピーであることから考えても決して高いとはいえないが、筆者が調査した中では最も高かった。水牛が牛より放牧権料が高いのは、森林省の説明では、多くの牧草を消費し環境破壊への関与度が高いからである。³⁸⁾一方グジャールが水牛を飼育するのは乳量³⁸⁾が牛の一・五—二倍ぐらいあるからである。また水牛は出産時期がほぼ一定なので仔牛の生産性(自然増加率)は牛より低い、遊牧・移牧には都合がよい。

ドーディ・タールの年間降水量は約千百ミリであり多くはないが、そのほとんどが六—九月に降るので

この時期の牧草は極めて良い。搾乳は朝夕二回行う。最初に仔牛に飲ませてから絞る。出産後六カ月頃までは、水牛一頭あたり一日に四キログラムの搾乳が可能である。以後の四カ月は乳量が減り平均一日二キロである。牛乳は麓の村から来る運び屋に売る。この運び屋がブリキに鉄の枠のついた、三〇リットル程の缶を担いで麓の道路まで運ぶ。ここで自転車でウツタルカーシーから来る仲買人に売る。この仲買人は缶二つを自転車に積んでウツタルカーシーまで運んで商店や、喫茶店、食堂などに売る。バスでくる仲買人もいる。

九月になると夏の牧地から冬の牧地へ向け出発する。出発の一カ月ほど前から牧草が不足してくるので、村人から青草をかって与える。冬の牧地はウツタル・プラデーシュ州のサハランブル (Saharanpur) 県ルーキー (Roorkee) 郡のモハン (Mohan) の近郊の標高約六百メートルの山地斜面にある。移動距離はおよそ二百キロメートルで、この移動に約一カ月かかる。移動中は、キャンバス地でできたテントで生活する。移動中、道端の草は無料で食べさせられるが、当然それで

は足りないので草のある私有地に料金を払って牛を入れる。時には牛が勝手に農地に入り込んで作物を食べたりしてトラブルになったり、公有地に入り込んで罰金を支払わねばならなかったりする。またこの時期に多くのグジャール家族が一斉に多くの家畜を連れて、唯一の自動車道路である国道を行くため、大交通渋滞を引き起こし、しばしばそれらの運転手とトラブルになる。

冬の牧地はやはり森林省の管轄地で、放牧権料は成畜一頭につき水牛二十ルピー、他は十五ルピーである。ここで四月まで六カ月放牧する。この期間は冬で、乾季のため牧草は極めて乏しい。四月にここを出発し五月にドーディ・タールに戻る。この時ドーディ・タールには牧草はまだないので村人から干草を買って与える。こうして一年のサイクルが終わる。

牧畜経済は以下のようになっている。まず収入であるが、その大部分は生乳の販売によっており、付随的にギー (バター) などの乳製品、牡家畜の売却による収入がある。一九八八年のアハマッド家の搾乳頭数は

表 III ヌール・アハマッド一家の 1988 年度の牧畜経営(収入)

項目	年間販売量(単位)	単価(ルピー)	総計(ルピー)
水牛のミルク	17000 Kg	5/Kg	85000
牛のミルク	750 Kg	5/Kg	3750
ギ	160 Kg	60/Kg	9600
牝水牛	5 頭	1200/1 頭	6000
計			104350

水牛二十五、牛二であった。水牛では、仔牛が生まれて後六カ月間は全部で一日平均百キロの牛乳を搾ったがそのうち約十キロを自家消費し残り九十キロを売った。以後の四カ月間は乳量は約半分になる。また移動中は搾乳せず、仔畜に全て飲ませる。二頭の牛からは最初の六カ月は日に七キロを搾り、うち二キロを自家消費し五キロを売った。残り三カ月は乳量が減り一日に約三キロを売った。またギーを月平均十六キロ、年間約百六十キロを売った。チーズは作らなかった。昨年は水牛は三十五頭生まれたが

そのうち十五頭が死に、残りの中で牝の五頭を売った。以上の収入を一覧にすると別表の通りである。

一方支出の方は別表の通りである。使用人はヌールの姉婿である。

これで見るとわかるとおり、生活支出がかりに三—四万ルピーとしてもアハマッド家はかなり余裕のある生活であることがわかる。もちろん借金は無い。ちなみに、同じ地域で遊牧するヌール・アラーム(七十歳)の場合、九人家族で牝水牛は十頭しかない。年収は約一万ルピーで、最近では毎年約二万五千ルピーの出費があり、結果として毎年一万五千ルピーの借金が上積みされていくという。借金は高利貸しからでなく、知人から無利子で借りられるのがせめてもの救いである。彼の家族構成では二十五頭の牝水牛がいないとやって行けないという。

ヌール・アハマッドに遊牧生活に対しいかなる意識を持っているのか尋ねた。彼はもし政府が水道、電気などの整った家と土地を提供してくれるなら数頭の牛を残して他を売り定住したいという。移動生活では家

表IV ヌール・アハマッド一家の1988年度の牧畜経営(支出)

項目	年間購入量(単位)	単価(ルピー)	総計(ルピー)
放牧権料(水牛, 夏)	50 頭	16	800
〃 (水牛, 冬)	50	20	1000
〃 (他, 夏)	7	10	70
〃 (他, 冬)	7	15	105
使用人給料	1人	400/月	6000
家畜医療費			4000
飼料			700
移動中放牧料			6000
合計			18675

もなく土地もな
く子供を学校へ
もやれない。冬
营地では冬で本
来牧草が少ない
上に多くの牧民
が集まってくる
ので飼料が不足
する。大木の枝
も多く牧畜には
向かない土地で
ある。また近年
は交通問題で車
のドライバーと、
また途中での放
牧問題で村人と
のトラブルも多
く、遊牧は容易
ではないという。

最後にヌール・アハマッドの服装であるが、ヒマラヤ・グシャールの男子の伝統的服装である、原色の長いシャツ、ドゥティー(一枚布のスカート)、チョッキというスリーピースを着ていた。色は緑であった。

(イ) 移牧グジャールの例

ヒマチャル・フラデーシュ州クルー県のマナリー(Manali)の町の近くにいくつかグジャールの夏の牧地がある。マナリーの町の西に張り出している、急な屋根を登り詰めた標高約二千八百メートルの地点にあるラーマ・ドゥーグ(Rama Doog)もそのひとつである。マナリーまで歩いて二時間、帰りは三時間強である。ここはグレイト・ヒマラヤ山脈の平原側にあるピール・パンジャル(Pir Panjal)山脈の中にある。この年間降水量は約千ミリでドゥディー・タールとほぼ同じであるが、風上側に四千メートルのダウラダール(Dhaola Dhar)山脈があるので夏の降水量は約五百ミリとドゥディー・タールよりかなり少ない。

ここにバシール・マハマッド(Boashir Mahmud 二十三歳)一家が放牧している。彼の先祖はジャンム

ー・カシミール州か今のパキスタン領にいたが一九〇一年か一九〇二年にこの地域に来たという。二十一人家族（結婚した妹を除き）であるが、父親と兄夫婦は約三十キロメートル南のタラース (Tharass) 村の定住家屋に住んでいる。後にこの家を訪ねたが定住用の普通の家屋であり、小屋ではない。兄は公務員としての勤めを持っているが、タラースに耕地と果樹園を所有し農業経営も行っている。タラースの三人を除く残り十八人がここラーマ・ドゥーグで放牧生活を営んでいる。つまりこの一家は、家族の一部が移動式牧畜に携わり、残りのメンバーが定住農耕を行う、いわゆる移牧の形態をとっている。

所有家畜は牝水牛一、牝水牛三十五、牡牛二、牝牛五、馬四である。彼はここに二つの小屋をたてている。それぞれ間口三・五メートル、奥行き五メートル、高さ一・八メートルほどである。板や、丸太を壁にし、ビニールシートやキャンバス地を振り分けて屋根根にしている。概念的にはテントと小屋の中間的なものである。ドーディ・タールのアハマッド一家の小屋に比べ

るとかなり小さい。いちばん奥が炊事場で土のかまどがあり背後にやはり土の食器・食品棚がある。小屋の内部には草が敷かれ、その上に一部絨毯が敷いてある。放牧活動は以下のように行われる。四月初めと月中旬までここラーマ・ドゥーグで放牧する。ここは牧草が余り豊富ではないので、ラーマ・ドゥーグでさらに三回放牧地を変える。それぞれに同様の小屋がある。放牧権料は水牛のみ八ルピーで、他は無料である。これを森林省（ヒマチャル・プラデーシュ州では Department of Forest Farming and Conservation）に支払う。これ以外に麓のナソーギー (Nasogri) 村に

水牛一頭あたり五十ルピーを支払っている。この支払について森林省に確認したところ、それは法的根拠のあるものではないが、麓の村はこの牧地に対して歴史的経緯に基づく無料放牧権を持っており、それを根拠にこの牧地に放牧するグジャールから放牧料を取っているのだらうとのことであった。クールー谷をはさんで、ラーマ・ドゥーグの対岸にあるジョブリ・ナラー (Jobri Nala) のグジャールも別の麓の村に同様の

放牧料を支払っていた。ドーディ・タールでもサーフでもこのような放牧料は支払ってないかった。

十月中旬にタラースの自分の家に帰る。移動距離は約五十キロメートルと短いので六日あれば着く。その自分の土地で作るともろこしの葉茎を飼料として放牧する。降水量が少ないなどのため飼料が充分でない年(近年はその傾向が強いという)はバンジャープ州ルディアーナ(Ludhiana)県のサムラーラ(Samrala)まで行き、知人の土地と家を借り放牧する。そこでの飼料は家畜の残す糞尿肥料と等価交換するため無料である。サムラーラまで行くと移動距離は二百八十キロ程になる。四月初旬にはラーマ・ドゥーグに戻ってくる。

ラーマ・ドゥーグに在る間はミルクを自分達でマナリーの町に持って行って商店に売る。冬、タラースに在るときは、二十キロメートル弱離れたクールの町でミルクを売る。彼らはミルクを運ぶのに、ウツタルカーシーやチャンバ地域のようなブリキの缶ではなく、われわれが石油を入れるのに用いるようなポリタンク

を使っている。マハマッド一家の昨年の搾乳頭数は十五十六であった。昨年は仔牛を中心に七頭も熊に食われたという。

一方農業経営についてみると、灌漑耕地が二十五ビガー(一ビガー約〇・二五五ヘクタール)、非灌漑耕地が五十ビガーで、他に果樹園二十五ビガーを所有している。これらは主に父と兄夫婦によって経営されている。灌漑耕地にはとうもろこし、小麦、野菜を栽培し、非灌漑耕地には、降水量の多い年には灌漑地と同様の作物を栽培するが、少ない年は牧草地にする。とうもろこしは葉茎を飼料とし実は食用とする。小麦は自給用で野菜は一部販売が可能である。クールー谷はインドで最も有名なリンゴ産地であるが、彼の果樹園でもブラムとともにリンゴを栽培している。ただ彼の所有するリンゴの木は数年前に病気がかかったので多くを切り倒してしまい、かつての五分の一しか収穫できないという。またブラムの木はまだ小さく出荷できない。マハマッド一家の一九八九年の農牧経営の収支は別表の通りである。

表 V パシール・マハマッド一家の農牧経営(収入)

項 目	年間販売量(単位)	単価(ルピー)	総計(ルピー)
ミルク(ラーマ・ドゥーグ)	4600(ℓ)	5	23000
ギ - (同上)	100(Kg)	70	7000
ミルク(タラース)	4000(ℓ)	5	20000
野菜			10000
リンゴ			5000
総 計			65000

表 VI パシール・マハマッド一家の農牧経営(支出)

項 目	年間購入量(単位)	単価(ルピー)	総計(ルピー)
森林省への放牧権料	31頭	8	248
ナソーギー村への放牧料	31	50	1550
農薬			5000
飼料			25000
家畜治療費			500
灌漑料			200
土地所有税			20
合 計			32518

この収支には生活支出が含まれていないが、これから推察するとマハマッド一家は家族が多いので裕福とはいえないまでも、生活に困るような状況ではない。

パシール・マハマッドに移牧生活に対する意識を尋ねた。彼が言うには、自分は定住家屋と土地があり家族の一部が生活しているので、子供に教育を与えるのに大きな問題はない(事実彼自身八年間の教育を受けているし、兄弟の内一人は修士、二人が学士である)。ただ森林省は放牧を厳しく規制しており、家畜の頭数を増やすことを認めないのでこれ以上収入も伸ばせないし、生活のその他の便宜を考えると、定住したいと思う。今すぐは無理だが、森林省は植林のために放牧権を取り上げたいと思っているので、やがては補償をもらって定住することになるだろうという。

最後にパシール・マハマッドはいわゆる西洋風のシャツとズボンを身につけており、ドーディ・タールのヌール・アハマッドのような伝統的な服装はしていなかった。聞くとマナリー地方のグジャールはほとんど伝統の服装をする習慣を失ってしまったとのことであ

った。

(ウ) 定住ヒマラヤ・グジャールの例

以上が遊牧・移牧を行っている典型的なヒマラヤ・グジャールの生活の一端である。一方ヒマラヤ山間集落には近年になって成立したヒマラヤ・グジャールの定住集落がある。(ヒマラヤ・グジャールを遊牧・移牧を行っているムスリムグジャールと定義づけた以上、正確には「もとヒマラヤ・グジャール」というべきかもしれない)。クールー谷のナグワイン村にもそのような集落がある。ナグワインはクールー谷の中心の町クールーから南に二十キロメートルの小さな村である。バシール・マハマッド一家のあるタラース村はビーズ (Beas) 川をはさんで対岸にある。

定住グジャールの一人、ハッサン・ディアーン (Hassan Dian) (四十二歳) によると、ここには十八家族のグジャールがいる。古老の話では、二百年以上前にはジャンムー・カシミールにいたが、人口が増え、牧草地が少なくなってきたのでこの地域へ移ってきたという。十八のグジャール家族中、五、六家族が移牧

表 VII ナグワイン村で移牧をやめて定住した家族

年度	移牧をやめた家族数
1980	4
1985	3
1986	1
1987	3
1988	1
1989	1

方で移動をやめた家族には十ビガーの土地を与えるという定住化政策をとっているためである。

移動をやめたグジャールは、手に入れた土地で飼育できるだけの水牛を除いて他は売り払い、家屋を建て、飼料用に栽培するとうもろこしで水牛を飼育し、自給用の小麦や野菜を栽培している。この村は定住農耕民がリンゴと米を広く栽培している豊かな村であるが、グジャールの定住集落は砂地で洪水の被害も受けやすい河川敷にある。それは定住と引換に供与される土地はこのような自然条件の悪いところに残っていないからである。それでも同じ村に住む、以前の定

型の牧畜を営んでいるが、残りは移牧をやめてしまったという。移牧をやめた理由は一様ではないがハッサンの話では、一方で州政府が森林保護・育成を理由に放牧を制限し、他

住農耕民に比して遜色無い、むしろ立派な住居を構えているグジャールも多い。

ハッサン・ディアーン一家についてみると、家族構成は、妻、息子五人、娘三人の十人である。彼の場合、昔は三十五頭の水牛を持って移牧を行っていたが、体の弱い子供がいて移動生活に耐えられなくなったため、一九八六年に移動をやめた。水牛は自分がここで定住して飼育できる分を残して他は移牧を続ける兄弟に売った。耕地は十二ビガー持っており、うち五ビガーにとうもろこしと小麦を栽培し、七ビガーを牧地として三頭の水牛を飼育している。彼の場合は土地は自分で購入したものである。彼の一家はここに二百年以上前から恒常家屋を持っており、家の場所も他の定住化グジャールと違って、河川敷ではなく上の国道沿いにある。定住して収入は五分の一から六分の一ぐらいに減り、移牧生活に比べて支出が増えたので生活水準は低下したが移牧生活は苦しかったので後悔はしていないという。

ヒマチャル・プラデーシュ州にはもう一つヒマラ

ヤ・グジャールの重要な居住地がある。それがチャンバ地方である。チャンバはジャンムー・カシミール州と境を接するヒマチャル・プラデーシュ州の西北山岳地域で、インダス川の支流ラビ川の流域にある。中心城市チャンバから東北に直線距離で約六キロメートル程のところにサーフー村がある。チャンバからバスで十五キロ、約一時間かかる。年間降水量は約千四百ミリ、六～九月に八百ミリの雨が降る。調査時にこの村には二百家族、二千人という多くのグジャールがおり、自治組織であるパンチャヤート (Panchayat) も組織されていた。このグジャールはかつてカシュミールに住んでいたと言われている。面接したあるグジャールは祖父の時代に牧地の不足が理由で、カシュミールのバラムラから移住してきたという。また以前はこのグジャールのほとんどが冬はダウラダール山脈を越えたヌールプル (Nurpur) や百二十キロ離れたパンジヤープ州のバターンコート (Pathankot) 周辺を牧地にして、この村の山にある夏の牧地との間に行き来する遊牧生活を送っていた。現在では二百家族のうち十

数家族ほどは完全に定住している。四十〜五十家族は村に一応恒常的家屋を持っているものの、夏は村から二十〜三十キロ奥へ入った山の牧地、冬はバターコートなどのバンジャーブ平原に移動する移牧民で、残りが村と夏の牧地の間を移動する移牧に従事している。前者の移牧民は恒常家屋を持っており家族の一部が定住しているとは言うものの、家族の多くが年間を通して、その家屋にほとんど住まないわけで遊牧に極めて近い形態である。

この定住グジャールの家屋は段丘崖にあるもの、河川敷にあるもの、段丘面にあるものなどそれぞれ場所も形態、構造もさまざまである。段丘崖斜面にへばりつくように建っていたある家屋は平屋で屋根は陸屋根で平らな石で葺かれており、壁は石を積んで土で塗り固めてある。グジャールに詳しい者の話では牧地の小屋は谷に面した壁がないだけで材料、形はこれと同じであるという。それらの小屋は筆者は未見であるがもしこれが事実とするこのグジャールは、ドーディ・タール、ラーマ・ドゥーグ、ジョブリ・ナーラー

のどことも違って、カシュミールのグジャールと同じ形の小屋（材料は違う）を用いていることになる。段丘上にある定住グジャールの家屋は切り妻の二階建てで、壁は先のものと同じ材料でできている。ヒマラヤ地方の多くの定住民家屋と同じく二階が台所や居間になっており一階は倉庫や家畜小屋になっている。ここでは素焼きの壺にミルクを入れ、先に攪拌効率を高めるように半円形に曲げた木を取り付けた棒を差し込んで、その棒を紐で回転させてギーを作っていた。

ここではミルクやギーの買い取り価格が安い。ミルク一リットルあたり三ルピー、ギーも一キログラムあたり五十ルピーと他の調査地域に比べて三〇〜四〇パーセントも安い。遊牧や移牧を行っているグジャールは二十五キロ程離れた山の牧地から自分たちでミルクをこの村まで運んでくる。そしてテークダール (Thekedar) と呼ばれる仲買商に売るが、このテークダールの流通支配力が強く、ミルクを買いたたかれる結果であろう。男性はドーディ・タールのグジャールと同じ伝統的な服を着るものが多い。

(1) 従来遊牧や移牧について定義も含めおまわらまに議論が行われてきた。例えば Arbos, P., 'The geography of pastoral life illustrated with European examples', *Geographical Review*, No. 13, 1923

Matley, M. I., 'Transhumance in Bosnia and Herzegovina', *Geographical Review*, No. 58, 1968

Grigg, D., *The Agricultural System of the World: An Evolutionary Approach*, Cambridge, 1974

今西錦司「遊牧論」大阪一九四八

後藤富男「騎馬遊牧民」東京一九七〇

などである。しかしこれまでの遊牧と移牧の研究は対象が全く別であり、遊牧と移牧の関係が一つの民族をめぐって論議されることがほとんど無かった。従って定義も「遊牧とは内陸アジア、西アジアなどで行われる……」となり、移牧は「地中海周辺で行われる……」となる。これを強いて同じ枠の中で定義すると「遊牧は「定住家屋を持たず、テントその他の一時的家屋に居住しつつ、牧草・水・気候などの制約から家族全員が家畜とともに、季節的に牧地間を移動する牧畜形態」が家畜とともに、季節的に牧地間を移動する牧畜形態である。移牧は「同じ制約から移動する牧畜形態であるが、農耕定住集落に恒常家屋を持ち、家族の一部だけが定住集落と他の牧地との間で家畜とともに移動し、残りの家族が定住集落で飼料などを生産する農業依存

度の高い牧畜」となる。(Johnston, R. J. (ed.), *The Dictionary of Human Geography* (2nd ed.), Oxford, 1986の定義をこれに近う)。このように定義すると本稿が対象とするヒマラヤ・グジャールには遊牧民も移牧民もいることになる。なお本稿では「遊牧」「移牧」は全てこの意味で用いている。

(2) 例えば

Johnston, R. J. (ed.) op. cit.

日本地誌研究所編「地理学辞典増補版」東京一九

八一

などの辞典の「遊牧」「移牧」の項でも、インドのものについては触れられていない。

(3) 彼らについての民族学的あるいは地理学的調査はガティータについては Newell, W. H., 'Goshen, A Gaddi village in the Himalaya', Shrinivas, M. N. (ed.): *India's Villages* (2nd ed.): Asia Publishing House, Bombay, 1960

Bose, N. K., *Some Indian Tribes*, National Book Trust, New Delhi, 1972

Rathien, C., Troll, C., und Uhlig, H., (ed.): *Vergleichende Kulturgeographie der Hochgebirge des Suedlichen Asien*, Franz Steiner, Wiesbaden, 1973

などによって行われているが、他にについては極めて

乏しい。

- (4) インドにおいてカーストと部族の区別は必ずしも明瞭とはいえない。一般にヒンドゥー教およびイスラム教以外の道徳律に従い、かつテリトリリーと共通言語を持つ場合が部族に定義されその他の場合がカーストに定義されるが、グジャールの場合、居住地域が広範で、宗教的にもヒンドゥーとムスリムがいて、経済的にも大きな地域格差があり、ある地域では部族と扱われ、ある地域ではカーストとして扱われている。なお部族の定義については

Hasnain, N., *Tribal India Today*, Harram Publisher, 1986, New Delhi, p. 12 ff. など参照

- (5) 後述の理由から現在の統計がなため、一九二一年から一九三一年のペンジャール地方でのグジャール族の人口増加率一〇・七% (Census of India, 1931 による) から推定
- (6) これらの用語は研究者の間で一般的に用いられているわけではなく、筆者によるものである。
- (7) クシャトリア(本来王族、武人身分)の中心カーストでアリア系や、侵入民族など出自はさまざまだが五、六世紀頃からインド各地に王朝を築いて政治的に台頭した。
- (8) それぞれの村落共同体において、理念的序列から

はブラーフマン(バラモン)の下にあったとしても、人口的、経済的、政治的に他に優越するカースト

- (9) インドでは特に社会的、経済的に未開発な状態におかれたカースト・部族を政府が指定して彼らに対してはさまざまな保護政策がとられている。それらに関して

Ministry of Information and Broadcasting, Government of India, *India 1987: A Reference Annual*, Ministry of Information and Broadcasting, Government of India, New Delhi, 1988

Singh, Ajit K., *Tribal Development in India*, Classical Publishing Company, New Delhi, 1984

The Constitution of India

Government of India, Planning Commission, *Five Year Plan (1st-7th)*

Hasnain, N., op. cit.

押川文字子「独立後インドの指定カースト・指定部族政策の展開」『アジア経済』二三巻第一号、一九八一を参照

- (10) Shashi, S. S., *The Nomads of the Himalayas*, Sundep Prakashan, Delhi, 1979, p. 39

- (11) Ojha, G. H., *The History of Rajputana vol. I*, Vedic Yantralaya, Aimer, 1927

- Vaidya, C. V., *History of Medieval Hindu India vol. II*, The Oriental Book Supplying Agency, Poona, 1924
- Verna, Y. K., *Gurjara Itikas*, Vir Gurjara Office, Meerut, 1954
- Puri, B. N., *The History of Gurjara Pratihals*, Oriental Publishers and Distributor, 1975
- Munshi, K. M., *The Glory that was Gurjaradesa*, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay, 1944
- Manku, Darshan Singh, *The Gujar Settlements: A Study in Ethnic Geography*, Inter-India Publications, New Delhi, 1986, pp. 1-4 43-50
- (51) Bingley, A. H., *History, Caste and Culture of Jats and Gujars*, Ess Ess Publications, New Delhi, 1978 (rep.), p. 9
- Cunningham, A., *Archaeological Survey of India Reports*, Govt. Central Press, Simla, 1871
- Thapar, R., *Ancient Indian Social History*, Orient Longman, Hyderabad, 1984, p. 188
- (52) Grierson, G. A., *Linguistic Survey of India*, Vol. 9, Pt. 4, Motilal Banarsidass, Delhi, 1968 (rep.), p. 9
- Thapar, R., *A History of India vol. 2*, Penguin Books Ltd., Harmondsworth, 1966, p. 142
- (71) Majumdar, R. C. (ed.), *The History and Culture of the Indian People vol. 3*, Bombay, 1954, p. 65 43-50
- (51) 京大東洋史辞典編纂会編『東洋史辞典』東京創元社 一九八〇、五五二頁
- Bhattacharya, S., *A Dictionary of Indian History*, G. Bragiler, New York, 1967, p. 206
- (91) Majumdar, R. C. (ed.), op. cit., p. 227
- (71) 女装(水谷真成訳)『大唐西域記』平凡社 一九五〇、三四八頁
- (81) 同上書 三五八頁
- (61) 同上書 三五八頁の附註
- (81) Majumdar, R. C. (ed.), op. cit., p. 153
- (71) Manku, D. S., op. cit., 6
- (81) Majumdar, R. C. (ed.), op. cit., p. 153
- (81) Grierson, G. A., op. cit., p. 10 f.
- (71) ibid., p. 925
- (81) ibid., p. 16
- (81) Manku, D. S., op. cit., p. 6
- (81) Babur (tr. by Annette, S. B.), *Babur-Nama*, New Delhi, 1979 (rep.), p. 481, p. 534
- (81) Shashi, S. S., op. cit., p. 34
- (81) ibid., p. 21

- (30) *ibid.*, p. 22
- (31) Barnala, S. S., 'Foreword', *Desertification and Its Control*, Indian Council of Agricultural Reserch, New Delhi, 1977
- (32) いばせ一雄
Bingley, A. H., *op. cit.*, p.47
Manku, D. S., *op. cit.*, 6
なつじり裏付けられる
- (33) Shashi, S. S., *op. cit.*, p. 44
- (34) Crooke, W., *The Tribes and Castes of the North-Western India*, Cosmo Publication, Delhi, 19747 (rep.) (*The Tribes and Castes of the North-Western Province and Oudh*, Calcutta, 1896), p. 449
- (35) Bingley, A. H., *op. cit.*, p. 13
- (36) Shashi, S. S., *op. cit.*, p. 19
- (37) Bose, S. C., *Geography of the Himalaya*, National Book Trust, New Delhi, 1976, (plate)
- (38) 同様に例えば羊より山羊の方が放牧権料が高いため、山羊は木の枝に飛びついてその葉を食べるので森林破壊への関与度が高いからである。
(埼玉県立大宮中央高等学校教諭)